コラム集

	タイトル名	ページ
１	小学校の詩「対話の森」（三行連詩）	９９
２	中学校の詩「思考について考える」（五行連詩）」	１００
３	電気おっちゃんの話	１０１
４	北風と太陽と涙	１０２
５	万能育児器の話	１０３
６	地域の教育力	１０４
７	トーキングストーン	１０５
８	拾った財布	１０６
９	セレンディップ（セイロン島）の三人の王子	１０７
１０	劣等感をチャンスに	１０８
１１	「ヘレン・ケラー」と「塙保己一」	１０９
１２	「魔法の杖」と「魔法の言葉」	１１０
１３	人生のプロジェクト	１１１
１４	長崎カステラ	１１２
１５	「ピグマリオン効果」と「ゴーレム効果」	１１３
１６	駅のホームで	１１４

※　このコラム集は、南島原ファミリープログラムより、著作者のNPO法人チェンジライフ熊本　理事　三角幸三氏の許可を得て掲載しております。
プログラムを実施される際の、まとめ時の説話などにご利用ください。

１　小学校の詩「対話の森」（三行連詩）

何でもオーケー
次々に話題が変わる
サーフィン（波乗り）対話

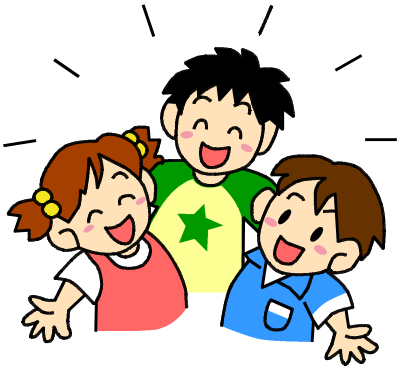
うんうん　なるほど
認め褒め励まし伸ばす
ハート（思いやり）対話

言葉を大切にし
豊かな表現にこだわる
オーラル（言葉）対話

石ころ握って
話す人と聴く人をコントロール
ストーン（石ころ）対話

鉛筆握って
言葉を使わず、文字で伝え合う
ペンシル（鉛筆）対話

テーマを決めて　ルールをまもり
リングの中でバトルする
フレーム（枠）対話



大きく広げて揺さぶって
ぎゅーっと絞り込む
ダイヤモンド（ひし形）対話

一つのテーマに絞り込んで
細かく分類し具体的に整理する
サンドグラス（砂時計）対話

いつ？どこで？
なぜ？どうして？と問答する
ロジカル（筋道）対話

図表を上手に使って
キーワードでまとめる
マトリックス（格子）対話

歩き回って、あちこちに
立ち寄りながら話し合う
ワールドカフェ（喫茶店）対話

わいわいがやがや
手と口と頭と体を使って伝え合う
アクティブ（活動）対話

２　中学校の詩「思考について考える」（五行連詩）

思考について考える
わからないときには、語句を分けてみよう
「思」と「考」
思うのは、心で
考えるのは、頭です

思考について考える
疑問に思ったときには、実際にやってみよう
「思」と「考」
思うことは、一人一人ですが
考えることは、みんなでできます

思考について考える
迷ったときには、関係ある語句と比べてみよう
「思考」と「学習」
思考は、頭の中から外に出すことで
学習は、外から頭の中に入れることです

思考について考える
悩んだときには、似た語句を集めてみよう
「思考」と「思案」
思考は、思って考えることで
思案は、思って案じることです

思考について考える
困ったときには、反対の語句を探してみよう
「思考」と「行動」
思考するの反対は、行動すること
対で考えると、頭の中が整理されます

思考について考える
行き詰まったら、基本に戻って考えてみよう
思考で重要な「言葉」と「文字」
思うのには、言葉や文字はいらないけれど
考えるためには、必ず言葉か文字が必要です

３　電気おっちゃんの話

私は、小学生の時、福岡から引っ越してきました。新しい学校では、友だちができずに、いつも一人で遊んでいました。様子を見ていた近所の電気修理店のおじさんが「うちに遊びにおいで、宝物がいっぱいあるよ」と誘ってくれました。

私は、そのおじさんを「電気おっちゃん」と呼び、土曜日、日曜日、平日の放課後、毎日遊びに行きました。電気おっちゃんは、壊れた電機製品の部品でラジコンカーを作り、壊れたモーターで発電機を作り、壊れたネオンサインでクリスマスのイルミネーションを作ってくれました。私にとっては魔法使いのようなおじさんでした。

ある日、電気おっちゃんが、壊れたバイクを改造して自動車を作り始めました。電気おっちゃんは、若い時、脊椎カリエスという病気になって背中の骨が曲がっていました。

普通の自動車は運転できないので、自分の体に合わせて改造するのです。完成した時、私を一番に乗せて、水前寺公園に連れて行ってくれました。

しかし、その水前寺公園で、事件が起きました。私たちは修学旅行の高校生から、石を投げられました。その石が、私の頭に当たって血が流れました。電気おっちゃんは、私に覆い被さって守ってくれました。家に帰ると、私の母に「私のせいで息子さんに怪我をさせて申し訳ありません」と謝りました。母は、「悪いのは、あなたではありません。体の不自由な人を、そんな目で見る世の中が悪いのです。いつも、息子に電気や科学の勉強を教えていただき感謝してます。」と答えました。

私は、小学校六年生でしたが、今でも、電気おっちゃんと母の会話を覚えています。あれから五十年以上経ちましたが、いまだに、弱い立場や体の不自由な人々に対するいじめや差別はなくなりません。私たちは、たくさんの人々との交流を深め、お互いに自分と違う生き方を認め合う心を育むことが大切です。

４　北風と太陽と涙

イソップ童話の中に、「北風と太陽」という話がありますが、これは人の心を動かすには厳しく強制するよりは、優しく接した方が効果的であるという教訓を童話にしたものです。

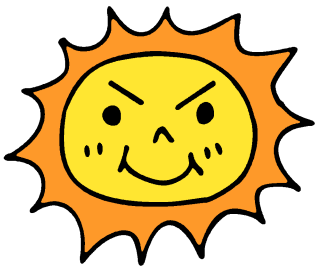
ある学校で万引き事件があり、生徒が警察に補導されました。翌日、担任の先生が、万引きをした生徒を職員室横の生徒指導室に呼び出しました。はじめに、体育系で生徒指導担当の先生が、彼の前に仁王立ちになり、正座をさせて万引きが犯罪であることを厳しく指導しました。生徒は彼の話を聞いていましたが「お説教はそれだけ？俺も忙しいんだからそろそろ帰してほしい。」とつぶやきました。

二番手は、優しそうな担任の先生で、「君の気持ちはよくわかる。よほど腹の立つことがあったのだろう。しかし・・・」と彼の境遇に同情し共感しながら、反省を促そうとしました。しかし、彼は「俺の気持ちが分かっているなら、早く帰してほしい」とつぶやきました。彼は、その優しさを逆手にとりました。結局、両方とも何の効果もありませんでした。

生徒側の勝利に終わり、彼は意気揚々と生徒指導室から職員室へ出ようとしたとき、気の弱そうな女の先生が、彼の前に無言で立ちました。彼女は、彼の目をじーっと見つめ涙を流し、彼女が、彼のことを本気で心配し信じていたことを話しました。そして、その信頼を裏切られたことが、どんなに悲しいかを悲鳴に近い声で話し、彼の前に泣き崩れました。彼女の泣き声は職員室中に響き渡り、全職員が彼と女の先生を取り囲みました。あまりの迫力に、つっぱり君もたじたじして「先生、恥ずかしいから・・・もう、わかったから泣かないでくれ・・・」というと、そそくさと職員室を後にしました。

体育教師の「北風」も、優しい先生の「太陽」も、彼には全く効果がありませんでした。しかし、か細い女先生の「涙」という新手の戦法で彼の心を動かしてしまいました。

最後に、彼女は、常日頃から熱心に彼の話に耳を傾け、根気強く話し合いを続けていたことも事実ですが、もう一つ、彼女は大学時代に演劇部に所属していたことを申し添えておきます。



５　万能育児器の話

これは、ユーモア作家、星新一の未来風刺小説の題名です。

二十一世紀後半、いそがしい夫婦のために、育児を代行する「万能育児器」という機器が発明される話です。この万能育児器は、授乳、おむつ交換、健康管理ができ、赤ちゃんが泣けば、甘い声で子守歌を歌い、童話の読み聞かせ、しつけまで、すべて引き受けてくれるという優れものなのです。値段も格安なので飛ぶように売れます。子育てから解放された父母たちは、子どもを育児器にまかせて，自分たちの仕事や趣味に熱中することができるようになります。子どもたちもまた、万能育児器から英才教育を受け、素直でかしこい青年となり、みんな立派に育っていきます。そして、しばらくの間は、みんな幸せで楽しい月日が過ぎていきます。

しかし、子どもたちが成人を迎えたある日、テレビから聞き覚えのある懐かしい万能育児器の甘い声で、あるメーカーの商品ＣＭが流れはじめます。その声を聞いた子どもたちは、理性を失い、親の意見や忠告には聞く耳を持たず、その懐かしい声の誘うがままに、紹介される商品を次々に買いあさってしまうという怖い話なのです。

この話はフィクションなのですが、私は、現在の私たちの子育てのあり方を皮肉っているように思えて、単純に笑うことができません。最近、親が子どもに我が家の伝統の味を教えたり、家族そろって食事の支度をしたりする機会が少なくなりました。インスタント・レトルト食品も多くなり、家庭のおふくろの味は「袋の味」になりつつあります。冠婚葬祭も、家の外で行われるようになりました。子ども達は、節分や七夕や餅つきは幼稚園や保育園の行事だと思っています。家庭学習は、塾や家庭教師にまかせて、自然・社会体験は地域イベントや事業に参加させる。親子で参加するのならば、意義があるのでしょうが、子どもだけの参加では、親子の絆は深まりません。大切な家族の絆や思い出だけは、金では買えないし他人に委託することもできません。休みの日には、家族で過ごす時間を大切にしたいものです。

６　地域の教育力

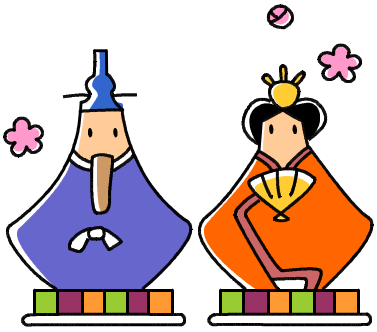
昭和３０年代、私の小学校時代は、日本中みんな貧しい時代でした。その中でも、母子家庭だった私の家は特に生活が苦しくて、母は、昼間は料亭で働き、夜は内職で洋裁や毛糸編みをやっていました。小学生だった私も、家に帰ると祖母と一緒に畑に出かけ野菜を作り、夕方には近くの井戸で水を汲み、薪を割って、ご飯を炊いていました。中学校でも持って行くお弁当は、麦ご飯に梅干しとたくあん。唯一のごちそうは、月に一回、１００ｇの牛肉ですき焼きを作り家族４人でつついて食べることぐらいでした。

そんな生活でしたから、私の上着やズボンにも、あちこちに継ぎ接ぎが当たっていました。靴下もすぐに破れるので、足袋をはいて登校していました。私は、それが恥ずかしくて、新しいものを買ってくれと、母に何回も頼みました。しかし、我が家には、そんな経済的余裕はありませんでした。我が家の事情はわかっているのに、私は不平不満ばかり言っては、いつも母を困らせていました。

ある日、母にいつも洋服の仕立てを頼みにくる近所のおばさんが、私の膝に当ててある継ぎをじーっと見て「やっぱり、あなたのお母さんはすごいね。細かく丁寧に縫ってある。こんな立派な仕事は、普通の人にはできないよ。あんた自慢していいよ。」と言って帰っていきました。

その話を聞いた翌日から、私は、嘘のようにズボンの継ぎ接ぎが気にならなくなりました。反対に、誇らしくさえ思えました。そして、朝早くから夜遅くまで家族のために働く母に感謝するようになりました。私の心を変えてしまった、あの近所のおばさんの一言が今でも忘れられません。

子育ての基盤は家庭にあるのは当然ですが、家庭では担えない教育力が、地域にはあるように思えます。



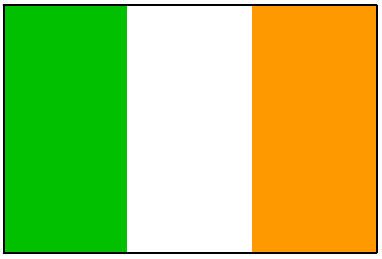
7　トーキングストーン

昔、アメリカインディアンが話し合いをする時は、みんなで円陣を組んで座り、中央に「トーキングストーン」といわれる石を一個おいたそうです。発言したい人が、その石を握って語り、石を持っていない人は、黙って最後まで真剣に聞くことが掟（おきて）でした。馬鹿にしたり笑ったり、途中で、話の腰を折ったり、異論を唱えたりすることは絶対許されません。反対意見があっても、相手が石を置くまでは、しっかりと聞くことがキマリなのです。

人間は、一人一人生き方が違うのですから、考え方が違うのは当たり前です。個性や多様性を認め合うためには、自分と考え方が違っても、最後まで聞く勇気を持つことが大切なのでしょう。

イギリスのアイルランドには、この「トーキングストーン」を活用した集団カウンセリング療法があります。北アイルランドでは、つい最近まで、文化や宗教、考え方の違いから争いが絶えませんでした。紛争は終わりましたが、同じ地域に，昔の敵と味方が一緒に暮らし生活をしている訳ですから、時々けんかやもめ事が起こります。

その根の深い対立を解消し、人間関係を改善するプログラムとして、この「トーキングストーン」と「故郷ハイキング」のセットプログラムが効果を上げています。お互いの心の中を知り合うとともに、一緒に故郷の美しい景色を、同じ方向で見つめ共感する体験をさせるのだそうです。



８　拾った財布

スーパーの駐車場での話です。車を降りて自動販売機の前に行くとその横のベンチに財布が落ちていました。拾い上げると、立派な革の財布です。中には一万円札と千円札が、併せて１０枚ほど入っていました。私は、思わずあたりをきょろきょろ見回しました。あたりには誰もいませんでした。私は、ジュースを飲みながら、しばらく待っていましたが、誰も取りに来ません。

しかたなく、私は、財布を交番まで届けに行きました。後日、落とし主から電話があって、お礼をしたいといわれましたが、丁寧にお断りしました。

話はこれでおしまいですが、どこか変だと思うところはありませんでしたか？それは、私が財布を拾い上げて中を確認したときに、あたりを「きょろきょろ」見回したことです。あの時、私は、拾った財布を自分のものにしようとは思いませんでしたし、今でもそう信じています。これは、神様に誓ってはっきり言えます。

しかし、それでは、なんであの時、「きょろきょろ」あたりを見回したのかと聞かれると困ってしまいます。人の心は、自分が思うほど正直ではないようです。ひょっとしたら、私の中の悪魔の心が、ひょっこり顔を出した瞬間だったのかもしれません。

心には、頭で考える心と胸で感じる心の二つがあるように感じます。この二つの心が、お互いに注意しあって正しくいきていくことができるのだと思います。

今度、財布を拾ったら、絶対「きょろきょろ」しないようにしようと思っています。

９　セレンディップ（セイロン島）の三人の王子

ペルシャの古い民話に「セレンディップの三人の王子」というお話があります。
セイロン島（スリランカ）からやってきた三人の王子が、協力して次々に難しい問題を解決し、誘拐された王女を救い出すというストーリーです。

三人の王子は、行方不明のラクダの足跡を見ては、ラクダが足を怪我していると直感します。食べた草の様子を調べては、歯が悪いと推測し、右側の草しか食べていないことに気づき、左目が弱っているのではないかと心配します。

この民話が語源となって、「未来を予測する能力」を、英語で「セレンディピティー」と言います。同じ意味の言葉に、「シックスセンス」という言葉がありますが、「シックスセンス」が神がかりな第六感なのに対して、「セレンディピティー」は、豊富な経験で培われた「危機を予測する能力」「チャンスを生かす直感力」のことを言います。

その洞察力や直感力は，日常生活の中の様々な経験や活動、成功や挫折体験によって培われます。神がかりなひらめきや神のお告げとは違うし、知識や情報から判断する能力とも違います。

先日、知り合いの大学教授が「最近、知識は豊富で物知りだけど、勘が働かない行動力のない学生が多くなった。」と嘆いておられました。リーダーシップ力は、その人の性格や考え方によるものではなく、その人の行動によるものです。どんなに豊富な知識を持っていても、「体験・対話」を経験しないと、勘も働かないし行動力も育たないようです。

情報化社会が進展する中で、子どもたちには、ますます知識や情報を収集し、思考・判断する能力が求められるようになるでしょう。しかし、それと同じくらい、他人とコミュニケーションしたり、行動・実践したりすることが大切であることを忘れてはならないと思います。なぜならば、経験不足を知識で補うことはできるが、経験自体を、知識で置き換えることはできないからです。

家庭でも、子ども達に、年齢にあった仕事を与えて、家族の一員としての役割を果たして貰いたいと思います。それが、子どもの「セレンディピティー」の力を育み、将来の職業観やキャリア意識を持たせることになると信じています。

１０　劣等感をチャンスに

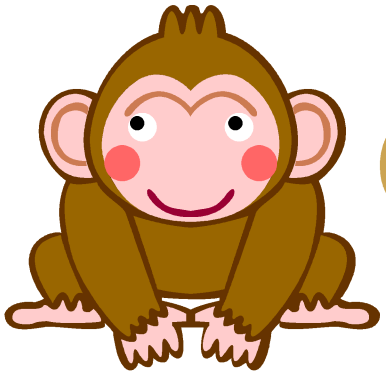
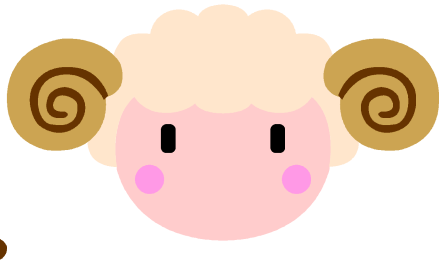
1967年、旭山動物園の入園者は年間40万人でしたが、1995年頃には、25万人まで減少して閉園の危機が訪れていました。そこで全職員が集まって話し合い、来園者に動物の行動や習性を説明し、興味関心を持ってもらおうということになりました。

しかし、動物園の職員は、動物の飼育は得意だけど、話したり説明したりすることは苦手な者ばかりです。それでも、動物園の生き残りをかけてみんな一生懸命練習してがんばりました。しかし、その中に、特に無口で話すのが下手な職員がいました。彼は、「動物は大好きだから、いつまでも動物園で働きたいが、人前で説明はしたくない。でも、しないと入園者が減って閉園しなければならない。」と悩んでいました。

このジレンマの中で、彼が考え出した説明方法が「行動展示」でした。言葉で説明しなくても、動物の生態や習性が一目で理解できる展示方法を、彼は発明したのです。そして、話し下手の彼が、その行動展示の必要性を、しどろもどろながら一生懸命に訴えました。それを聞いた職員たちは「あの無口な男が頑張っている。俺たちも頑張らなければ」と思い動き始めます。旭山動物園が、「行動展示」を全園展開すると、入園者は爆発的に増えました。旭山動物園は、日本の一番北にある田舎の動物園ですが、今では年間300万人が訪れる大人気の動物園になりました。

私たちには、みんな苦手なことが一つや二つはあります。それを乗り越える方法は二つあります。一つは一生懸命努力をして苦手を克服すること。もう一つは、それに代わる方法を考え出すことです。

苦手なことにチャレンジすることも大切です。しかし、どんなに頑張ってもできないことだってあります。そんな時は、くよくよしないで、違う方法を考えることです。大切なことは、一つのことにこだわらずに、いろいろな方法を考えることができて、みんなで協力して困難を乗り切る団結力と強い意志を持つことではないでしょうか。

１１　「ヘレン・ケラー」と「塙保己一（はなわほきいち）」

ヘレン・ケラーは、戦前と戦後の二回、日本を訪れています。一回目の訪問（昭和１２年５月）では、長崎の雲仙や熊本の三角港・阿蘇山などを訪れて、長崎・熊本で講演会を行っています。新聞記者から「日本人で尊敬する人は？」と聞かれて、彼女は「塙保己一」と答えたそうです。彼は、江戸時代の検校（視覚障害の学者）で百科事典「群書類従」を版木で編集した学者です。幕末のペリー来航の頃、捕鯨基地としてアメリカは小笠原諸島を「アメリカ領土」と宣言しますが、彼が編集したこの事典に「小笠原諸島」の記述があることから、しぶしぶ日本に返還したと言われています。

ヘレン・ケラーは、彼が、「源氏物語」の講義をした時のエピソードについて語っています。講義中に風が吹いて、ろうそくの炎が消えて真っ暗になっても、彼は止まることなく講義を続けたこと。弟子が、「明かりをつける間しばらくお待ちください」とお願いすると、保己一は「目が見える人は不便ですね」と言って弟子を笑わせたといわれています。

ヘレン・ケラーのお気に入りの話だったようです。このように、私達は、マイナス面だけに焦点を当て、悲しんだり同情したりするだけでなく、プラス面にも光を当て、ポジティブに捉えて、みんな元気がでるような仕組みを考えることが大切だと思います。

１２　「魔法の杖」と「魔法の言葉」

映画「ハリーポッター」では、最後の章でポッターは、世界最強の魔法の杖、ニワトコの杖を折って捨ててしまいますが、なぜポッターは、大切な魔法の杖を捨てたのでしょうか。

ハリーポッターは、もう杖の必要のない時代になったから、杖が存在すると悪用されるからだと言っています。

死の秘宝の章で、ダンブルドア校長先生は、「ポッターよ！その昔私は言葉に不思議な力があることを知った。それ以来、言葉を磨いてきた。ポッターよ、言葉こそ世界最高の魔法じゃ。人を傷つけることも癒やすこともできるのじゃ。」と言っています。

魔法の杖や魔法のホウキがないと魔法を使えないのならば、私たちは、魔法使いになることはできません。

しかし、言葉に魔法の力があるのならば、言葉を磨けば私たちだって魔法使いになれるはずです。人を傷つけるのも言葉、人を救うのも言葉です。私たちも言葉を磨いて、ハリーポッターのような世界最強の魔法使いになってみたいと思いませんか？

しかし、言葉を磨くためには、言葉だけではだめなのです。同時に心も磨かなければ効果は半減しています。ちょっと油断していると悪魔の心が忍び寄り、ボルデモートのように人々を傷つけることになりかねません。言葉と心を磨いて、人を癒やし元気づける魔法をしっかり学び、この世の中に未だに残るいじめや差別をなくし、みんなが元気を取り戻せるような「言葉の魔法使い」になってみませんか？

１３　人生のプロジェクト

漫画家になりたいと思っている青年が
毎日、がむしゃらに漫画を描いていました
しかし、なかなか考えがまとまりません
霧の中で、もがいているようでした

彼は、雑誌の懸賞漫画に応募しようと考えました
その締切りが，三ヶ月後だと知った途端に
彼の行動は、とても具体的になりました
登場人物、ストーリー、ページ数、場面、
コマ割、背景、人物、吹き出しの台詞
締切りまでの細かなスケジュールができあがりました

スコップで、地面を掘っている二人の少年がいました
「あなたは何をしているの？」とたずねると
一人は「穴を掘っている」と答えました
もう一人は、「井戸を掘っている」と答えました

この二人の少年の将来は大きく違ってくるでしょう
同じ仕事でも、完成イメージやゴールを意識したり
目標を持つことで、一日の過ごし方が変わります
自分の未来が見えると、生き生きと行動的になります
毎日が明るく充実したものになります

１４　長崎カステラ

昔、私は小学校の教師をしていたので、修学旅行でよく長崎に行きました。修学旅行のお土産は決まってカステラでした。当時小学生の息子と幼稚園の娘は、いつも私のお土産を楽しみにしていました。

私が、長崎の修学旅行から帰った翌日、子ども達は、お土産のカステラの前でもめていました。昔はカットしたカステラは売ってありませんでしたから、ナイフでカットしなければいけません。息子は等分したカステラを娘に先に取らせて、残りを自分が取りました。しかし、食べようとすると娘は気移りがして、やっぱりお兄ちゃんの方がいいと言うのです。交換して又食べようとすると、また、やっぱりもとの方がいいと言いました。息子は困り果てていましたが、ふと名案が浮かびました。等分したカステラを、さらに二つにカットして娘に見せて「一つと二つはどっちがいい？」と聞きました。娘は間髪入れず「二つがいい！」と答えました。息子の作戦通り、娘は私の所に飛んできて、「お兄ちゃんは一つ、私は二つ！」といって喜んでいました。

それから、数日して、妻がイチゴケーキを買ってきました。娘はイチゴケーキは大好きですが、ほとんどイチゴだけしか食べません。イチゴだけぱくっと食べて、「おかわり」といいました。妻がおかわりはありませんというと、娘は「おかわりがほしい」とだだをこねました。それを見ていた息子は、娘の食べかけのイチゴケーキを持って台所に行き、冷蔵庫からイチゴを取り出して、食べかけのケーキの上に載せました。

そして、「ハイ、おかわり！」といって差し出しました。娘は２～３回そんな形でおかわりをしていましたが、流石に自分だけおかわりをするのを申し訳なく思ったのか「お兄ちゃん達はおかわりしないの？」と聞きました。息子が「お兄ちゃんは一個で我慢するよ。」というと、娘は少し申し訳なく思ったのか「私のイチゴケーキをお兄ちゃんにあげる。」といって部屋を出て行きました。もう成人している娘にこの話をすると、「私ってそんなにわがままだったかな？」と首をかしげますが、私にとっては、懐かしい大切な思い出になっております。時々思い出しては、一人でクスクス笑っています。

１５　「ピグマリオン効果」と「ゴーレム効果」

キプロスの王「ピグマリオン」は、大理石で「人間像」の彫刻を造りました。キプロスの国民は彼の作品を絶賛し、神々は彼に名人の称号を与えます。すると、彼は、さらにその像を生命の通う人間にしたいと思い、再び彫り続けます。そのピグマリオンの信念と行動力は女神アフロディテの心を動かし、その像は、本当に優しい心と強い意志を持つ人間になるというお話です。「信念を持って努力したり、褒め励まし続ければ、不可能なことも可能になる。」という心理学用語「ピグマリオン効果」の由来となった伝説です。

ゴーレムとは、ユダヤで語り継がれている泥人形です。ゴーレムは、創った主人の意のままに操られ、命令すれば何でもするのですが、叱らないと最後までやりません。額の文字を書いた紙が剥がされると泥に戻ってしまいます。「命じられると、善悪の区別なく何でもしますが、自分の意思では何もできません。」「ゴーレム効果」は、このお話がもとになった心理学用語です。

〇根気づよく「認めて褒めて励まし」不可能を可能にする「ピグマリオン効果」

夢や目標を持たせながら活動させたり、長所も短所も丸ごと認めたうえで、得意なことはしっかり褒め、苦手なことにチャレンジする時は励ましたりすれば、子どもは大きく伸びます。これが「ピグマリオン効果」です。

〇ダメ出しの言葉で可能性とやる気を奪う「ゴーレム効果」

「しなさい」と言われると、渋々します。「そうじゃない、こうしなさい。」「なんでこんなこともできないの」と言われ続けていると、その言葉通りにやる気も能力も落ちていきます。これが「ゴーレム効果」です。

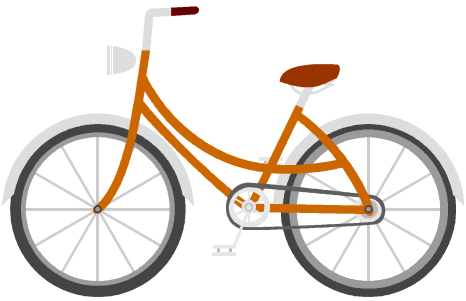
１６　駅のホームで

私は、よくＪＲの列車で移動します。先日、乗り継ぎのためのホームで列車を待っていました。フェンスの向こうには自転車置き場があり、よく見ると自転車が２０台ほど将棋倒しになっていました。そこに、女子高生がやってきました。

自分の自転車を取り出そうとしますが、重なっていて取れません。彼女は仕方なく右から順番に自転車を起こしはじめました。

すると、そこに中年の女性がやってきて、「あ～あ！私の自転車まだ新品なのに！」と言って女の子の方を見ました。そして、倒れている自分の自転車を引きだそうとしました。案の定、自転車は取り出せません。中年の女性は、やっとその状況を理解したらしく「ごめんね～、倒れた自転車を起こしていたんだね」と申し訳なさそうに謝りました。女子高生はにこっと笑って、「分かってもらえればいいんです。」と言いました。

それから、二人は仲良く協力しながら自転車を起こしはじめました。二つの自転車を取り出し終えると、二人は、荷物をかごに入れて帰ろうとしました。

しかし、まだ５～６台の自転車が倒れています。二人は、顔を見合わせ、再び倒れている残りの自転車を起こし始めました。

すべての自転車を起こし終わると、二人はにっこり笑いハイタッチをすると、颯爽と自転車に乗って街の中に消えていきました。私は、その背中を見送りながら、目頭が熱くなっている自分に気がつきました。二人の後ろ姿がとても大きく見えました。